

「この問題分かる人！」
「ハイ！ハイ！」
「2と3を足して5！」

**学校を地域の
人づくりの場に**

プロジェクト」。2004年、教育環境の改善という任務を担い、現地にJICA専門家として赴任したのは原雅裕さん。そこで彼が目をつけたのは「学校運営委員会（COGES）」。

そこで原さんたちは、COGESの設立、運営の支援に着手することに。「COGESという場で学校側と保護者が直接顔を合わせ、学校で何が問題なのか、双方が何を求めているのかを共有しました。その議論を踏まえて計画を立て、地域ぐるみで学校づくりを進めるといふ仕組みを作ったのです」と原さん。

そして今、原さんの思いを引き継ぎ、現地で奮闘するのが影山晃子さん。05年にプロジェクトに加わった彼女だが、最初にニジェールの地に降り立ったのは2000年、青年海外協力隊としてだった。

「電気も水道もない、トイレもやぶの中といった環境での生活でしたが、地域の人たちは強いきずなで結ばれていました。みんなの

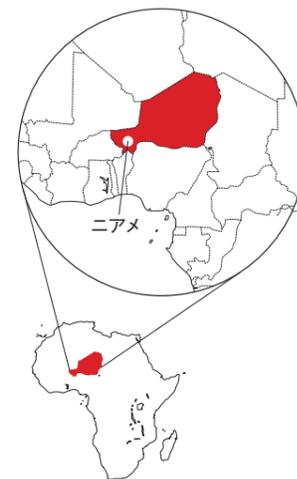


放課後の補習授業で算数ドリルを解く子どもたち

ニジェール
from NIGER

**地域の希望を
学校ではぐくむ**

学校に行つて、授業を受けて、友達と遊ぶ。そんな“当たり前”の権利が奪われている子どもたちのために、西アフリカの内陸国ニジェールが日本と共に取り組んできた住民参加型の学校づくりとは。



真つ青に広がる空の下、わらぶき屋根に覆われた小さなスペースで、子どもたちが黒板の前に机を並べている。床は土、壁もわら。手にしているプリントはポロポロだが、子どもたちの表情は生き生きと輝いている。

学校は、まさにそんなニジェールの強みを生かした仕組みです。JICA専門家として国際協力の現場に戻ってきた影山さんは、ニジェールの草の根の「現場」を熟知する存在として奔走している。

**学力アップ！
算数ドリルの導入**

2012年から新たなフェーズに入った「みんなの学校プロジェクト」。これまでは学校へのアクセス、インフラに重きを置いていたが、新たに力を入れていのが教育の質の改善だ。ここ数年で就学率は伸びているものの、「子どもたちに本当に学力が付いているのか」という疑問の声が上がり始めたのです」と影山さんは話す。実際に調査してみると、読み書き、計算ができない子が多くいることが明らかに。落第や退学を余儀なく

西アフリカの内陸国ニジェールの就学率は約5割だった。その背景には、学校や教師の数が足りないこと、さらには、一家の貴重な

くされ、保護者からも「学校に行かせているのに」という不満が聞かれるようになった。子どもたちの学力向上のネットワークとなっていたのが、学習時間の確保。原さんのアドバイスを受けながら、影山さんたちは地域住民と共に知恵を絞り、放課後の補習授業で「算数ドリル」を導入することにした。そう、私たち日本人も小学生の時に繰り返したあの「ドリル」だ。

「ニジェールの子どもたちには、繰り返し勉強する習慣が身に付いていません。ドリル形式なら、学校側の負担を増やすことなく、自主的に勉強に取り組めるようになるのではないかと考えました」。ニジェール版「算数ドリル」を開発し、各学校で試行的に導入を始めています。

影山さんを含む日本人専門家

労働力である子どもを手放したくないといった複雑な家庭の事情があった。

そんなニジェールの教育現場に、新風を巻き起こしたプロジェクトがある。通称「みんなの学校

は、いかなる場合であっても、COGESの「黒子」に徹している。地域の学校はそこに暮らす人々が、みんなのでつくるものでなければならぬからだ。現地スタッフのアリ・ウンジャイさん（元州教育事務所長）は、「コミュニティのつながりを強めるという意味でも、みんなの学校」がニジェールに与えたインパクトは大きい」と評価する。

「学校、保護者、政府などプロジェクトにかかわるすべての人が、目指すべき方向性を共有できるように意識しています」と影山さん。元気いっばい算数ドリルを解く子どもたちの姿を見たい。それが彼女たちの願いだ。

ニジェールの「みんなの学校」は、影山さんらプロジェクトチームの思いをのせて、次のステップへと歩みを進めている。



プロジェクトの関係者たちと、今後の方向性について話し合う原さん（右奥3人目）と影山さん（右奥2人目）

【上】学校で学べることは、ニジェールの子どもたちにとって大きな喜び。教室はいつも活気にあふれている
【下】黒板を見つめる瞳は真つすぐだ

地域の学校はみんなで作るもの。住民集会には「子どもたちが生き生きと学べるような学校にしてほしい」とたくさんの方が集まる